令和6年度　学校評価

重点目標	❶	指導支援の充実　～楽しい（できた、分かった）学校～
	❷	安全で安心な学校づくり～一人一人を大切にする学校～
	❸	教職員の在校等時間の縮減～教職員が元気で質の高い学校～

重点目標 ❶	指導支援の充実　～楽しい（できた、分かった）学校～			
担当	具体的目標	具体的方策	評価結果	課題
幼小学部	習熟度に応じた段階的な指導を行う。	適切な実態把握をもとに個別の指導計画、年間指導計画を作成し、家庭と課題や指導方針の共通理解を図る。	形成的評価を行い、各幼児児童の習熟度に応じた学習内容を検討しながら指導を行うことができた。	引き続き、実態に応じた適切な指導を実践する。
中学部	生徒が日々の学習を積み重ねていく授業を行う。	主体的な活動を促す学習計画と身に付けたことを生かす学習場面を設定する。	適切な実態把握の基、主体的な学びを重視した教育を継続して実践し、生徒に必要な力が身に付いた。	主体的・対話的で深い学びを意識した授業を行う。
高等部	授業改善に努め、卒業後を見据えた指導・支援の充実を図る。	授業内容を改善しながら、各生徒の自己選択を大切にした主体的な体験を重視した学習を進める。	学習内容の検討および再構築をする中で各生徒の主体的な体験を重視し、日々の授業改善に取り組んだ。	主体性と対話的な学びを重視した授業をさらに推進する。
訪問教育部	他者とのつながりを感じられる取組を計画的に取り入れる。	訪問生同士や通学生との交流がもてる取組を計画的に行う。	集団学習やオンライン交流などで学年の友達と交流できた。訪問生同士のオンライン交流も実施できた。	より多くの訪問生が参加できる訪問行事の機会を設ける。
教務部	的確な実態把握と適切な課題設定	個別の指導計画を個別懇談やスタディ会等を通して、保護者や職員と確認、共有する。	教育支援計画や指導計画を整え、保護者と目標・手だてや成果・課題を共有することへの意識が高まった。	保護者及び教員間で実態や課題を共有する。
研修部	教職員の能力や専門性の向上を目指す。	特別支援学校の教員として必要な知識、技能の習得、安全に関する訓練等の研修を計画する。	さまざまな研修を企画することで、教員が自ら必要である研修を選んで、知識や技能を習得することができた。	教員のニーズに応えることができる研修を企画していく。
図書部	読書活動への興味・関心の拡大や図書室利用の推進を図る。	図書への興味・関心を高める掲示や企画をし、図書室の利用や読書活動を呼びかける。	読書週間の企画を通じ、幼児児童生徒へ図書室利用を呼びかけることができた。	蔵書整理や読書環境の改善、図書室利用統計を進める。
教育情報部	生徒のタブレット端末の利活用を増やす。□	児童生徒が主体的に授業でタブレット端末を活用できるように、職員へ授業実践やアプリの活用法の紹介を行う。	授業や児童生徒に合ったアプリや支援機器の提案、アプリの導入、支援機器の購入を行った。	生徒に合わせた利用ができるように、ICT活用力を高める。
生徒指導部	教職員が質の高い生徒指導を行える学校を目指す。	一人一人の気持ちに寄り添った適切な生徒指導を行うための、教職員への人権研修を検討・実践する。	研修や保護者との連携により各部、各学年でのより細部における指導の方向性が確認できた。	人権研修の質を高め子ども達に寄り添う指導に取り組む。
進路指導部	一人一人のニーズに応じた適切な進路指導を行う。	キャリア教育の視点から幼児児童生徒の正しい実態把握をし、本人の意思と年齢に応じた支援を大切にする。	キャリア教育について考える機会を設けたことで、教員間で今後の指導について共通意識をもつことができた。	卒業後の進路や生徒の目指す姿を皆で共有し指導していく。
保健部	保健や環境及び給食、医療的ケアについて学校全体で取り組む。	研修や訓練及び情報共有の場を設定し、教育活動と一体的に進められるようにする。	訓練の方法や情報共有の場の設定を見直して実施したことで、より効果的に行うことができた。	今後もより良い研修や情報共有の仕方を模索していく。
自立活動部	保健や環境及び給食、医療的ケアについて学校全体で取り組む。	研修や訓練及び情報共有の場を設定し、教育活動と一体的に進められるようにする。	外部専門家の研修を積極的に取り入れることで、専門性の向上や指導内容の充実を図ることができた。	専門家と連携を取りながら、専門性や指導の向上に努める。
教育支援部	校内外の支援が必要な幼児児童生徒へのコーディネートを行う。	校内外へ、センター的機能としての取組内容の周知や特別支援教育に関する情報提供を行い、連携しやすくする。	「つぼみ相談」については、校外学校の相談活動を研修形式やオンラインで実施し、情報提供することができた。	「つぼみ相談」の活動内容をさらに校内外に発信していく。
寮務部	幅広い生活経験を積み、自立した力を身につけるよう支援する。	個々のニーズに合わせ目標を設定し、支援ツールや方法を工夫して、日常生活への実践を増やす。	個別の目標や些細な事でも舎生が自らチャレンジする場面を増やすことで、達成感や自信につながった。	共同生活の特性を生かし思いやりの心を育んでいく。

重点目標 ❷	安全で安心な学校づくり～一人一人を大切にする学校～			
担当	具体的目標	具体的方策	評価結果	課題
幼小学部	肢体不自由教育の専門性を生かした安全な指導を行う。	実態に応じた適切な姿勢保持、体位変換、摂食指導等を検討し、安全かつ安心感をもてるような指導を実践する。	心身の実態の変化に応じた手だての検討やヒヤリハット一覧の活用を通して、安全面も配慮して指導を行った。	肢体不自由教育の専門性を図り、安全性を高めていく。
中学部	生徒が安心して活躍できる教育環境をつくる。	個性を尊重した高い人権意識の下、教員間や保護者、関係機関との連携を図り適切な生徒指導を行う。	「生徒の人権を尊重した指導・支援」や「関係者との連携」を行い、生徒が安心して力を発揮することができた。	引き続き個性を尊重した人権意識の下、生徒指導を行う。

高等部	校内外の連携を深め、個に応じた安心安全な環境づくりに努める。	各生徒が安心して必要な支援を受けられるよう、保護者や職員間および外部機関との連携を深める。	職員間、保護者、外部機関との連携を大切にして、個に応じた支援の充実に努めた。	各生徒のキャリア形成の共通理解を基に、連携を深める。
総務部	安全な学校づくりに取り組む。	物品の管理・点検を行い、事故等のないよう安全意識を高める。	点検物品の担当分掌を決めたことで、管理する分掌が明確になり、安全管理意識を高めることができた。	物品を教室に配置する前に管理できるシステム作りが必要。
教育情報部	教員のICT環境の充実を図る。	マニュアル等を作成し、職員のICT機器の利活用推進を図る。	PC等の設定する説明会を設けたり、実情に合わせマニュアルを作成したりすることで、ICT環境の充実を図った。	マニュアルの内容を定期的に更新する必要がある。
生徒指導部	安全で安心な学校づくりに取り組む。	安全な学校生活を送るための防災・防犯体制の見直しや職員研修等、環境の整備に取り組む。	訓練及び研修は計画どおり実施できた。反省や意見を生かし、職員の防災防犯意識をより高めることができた。	状況に即した防災防犯マニュアルの更新をする。
進路指導部	進路だよりや掲示板を活用した情報提供を行う。	全校の幼児児童生徒と保護者が進路の流れを理解し、適切な時期に家庭で準備できるように促す。	進路だよりを通じて各部の進路指導の様子を伝えたり、個別に情報提供したりすることができた。	各事業所の新しい情報を随時提供していく。
保健部	安全で安心な学校生活を送れる環境を整える。	環境整備や健康観察、ヒヤリハット事例の共有を図り、衛生管理と職員の安全意識の向上に努める。	健康観察や環境について注意すべき点をその都度発信したことで、教職員の安全意識の向上につながった。	常日頃より環境衛生に注意できるよう今後も発信していく。
自立活動部	外部専門家を活用することができる環境作り	相談会の年間予定の配布やマチコミの活用を通して、相談会の周知を図る。	相談会の募集状況をマチコミを使って周知することで、多くの保護者に相談会を活用していただくことができた。	相談会などで、専門家を活用できる環境づくりを継続する。
教育支援部	災害時に備えて「心のケア」の体制作りに取り組む。	災害発生時や学校再開前後など、段階に応じた支援のための具体的な方策を提示する。	面談記録用紙については、さまざまな資料を参考に項目等を考えた。活用できるように引き続き準備を続ける。	今後も、災害時の「心のケア」の準備に取り組んでいく。
寮務部	安全で安心な寄宿舎環境の確保に努める。	緊急時に備えた適切な訓練や対策を実施し、舎生の健康を考慮した施設管理と心理的支援を行う。	実効性のある各種訓練の実施、宿直者間での緊急時の対応確認や舎生の健康状態などの情報交換を行った。	飛散防止フィルムを貼るなど、防災対策を進めていく。

重点目標 ❸	教職員の在校等時間の縮減～教職員が元気で質の高い学校～			
担当	具体的目標	具体的方策	評価結果	課題
幼小学部	効率的な業務の進め方を検討して実践する。	教材の共有使用、会議の進め方の整理等を行い、業務量の削減に努める。	会議の効率的な運用や、校外行事の効果的で効率的な実施に向けて検討を行った。	学習保障をしながら業務効率化を検討していく。
中学部	質の高い授業づくりや職場づくりを効率よく行う。	それぞれの教員がもつ知見の共有や学び合いをするなど、部全体で情報共有し有効活用する。	対話や学び合いの中で、心理的安全性を高めたり知見の共有を図ったりし質の高い授業づくりへとつながった。	部全体で情報の共有を図り、効率よく授業づくりを行う。
高等部	職務の効率化や分散化を促進し、働きやすい環境づくりに努める。	教材の共有化、業務の整理と分散化、会議の効率化を推進する。	会議時間の短縮、業務の効率化・分散化を進めることで、授業準備時間の確保につながった。	教育活動の質の向上を意識しつつ、業務改善に取り組む。
訪問教育部	職員が心身ともに健康で、働きやすい環境づくりに努める。	記録文書等の簡略化と校内業務の精選を行う。	感染症対策をはじめ安心安全に訪問授業へ臨めるように、校内指導時の配慮事項を洗い出した。	校内指導時の問題を改善できるよう働きかけが必要である。
総務部	業務知識やノウハウ等をシステムにより共有化する。	「職員必携」を試用し、データーの共同利用（アライアンス等）に取り組む。	「職員必携」があることで、学校業務の不明点がいつでも検索・確認することができた。	試用結果の意見を聞き、より使いやすく改定していく。
教務部	スクールエンジンの運用拡大	出席簿以外の活用を検討する。	幼児児童生徒名簿のスクールエンジンでの運用を来年度から導入していく準備が整ってきた。	スクールエンジンでの諸帳簿の利用を検討し、進める。
研修部	さまざまな働き方に対応できる研修環境を整える。	研究や教材・教具、ICTに関する情報をTeamsを活用し、学校全体で共有することで、教員の負担軽減を目指す。	Teamsの「いちまる研修部」で、さまざまな研修や教材など情報共有できるようにした。	Teamsの活用があまりなされていないので、工夫が必要。
図書部	図書室運営や蔵書管理の業務をスムーズに行う。	新刊図書の受入や廃棄図書の手続きなど蔵書管理業務のチェックリストを作成し、業務の効率化を図る。	システム入力や原簿記入などの業務をペアや分担で進め、全体で協力し合って行った。	スモールステップでの分担業務で偏りなく進める。

学校関係者評価を実施した評価項目	❶的確な実態把握と適切な課題設定、学習環境の整備、有機的なTT ❷環境整備（防犯、防災、衛生管理等）、開かれた学校の推進 ❸ICTの利活用による業務の効率化、教材等の共有化
総合評価	概ね目標を達成することができたが、項目によっては課題が残った。今後も、重点目標に関わる目標及び効果的な方策を掲げていく必要がある。保護者アンケートや学校評議委員の方々からの御指摘の声を職員一同で共通理解を図り、教育活動に活かしていくように取り組んでいく。
学校関係者評価委員会の構成及び評価時期	・構成…学校関係者評価委員（学校評議員）5名 医療関係者、学識経験者、進路関係者、保護者代表、地域住民代表 ・評価時期…第1回7月、第2回2月